

	測定する能力
論理的言語力	論理的読解力A
論理的読解力	論理的読解力B
論理的思考力	論理的思考力
論理的表現力	論理的表現力

問題I 論理的言語力

第二問 解答 (各5点 完全解答)

(1) 行数 八 行目	正	誤	負う
(2) 行数 十四 行目	正	誤	負わせる
(3) 行数 五 行目	正	誤	薬と偽った泥の船も唐辛子入りのみそも
(4) 行数 十七 行目	正	誤	薬と偽った唐辛子入りのみそも泥の船も
(5) 行数 十八 行目	正	誤	おじいさん

■解説

- 主語がウサギなので、タヌキにやけどを負わせたとする。
- 「薬と偽った」↓「泥の船」では意味が通じない。
- タヌキは、おじいさんに「婆汁を食べさせたのだから、「おじいさん」は間違い。
- 「そして」の前は書きかえを肯定的に述べているのに対して、直後はそれを「物足りない」としているのので、逆接に変える。
- 「語り継がれてきた」は、直接「昔話」につながっているのので、読点を打つことはできない。

第二問

■解答 (各5点)

- 第二段落 おじいさんが畑
- 第三段落 ところが最近、
- 第四段落 元の「かちかち

■解説

冒頭、「かちかち山」の全体的な説明。
二行目、「おじいさんが」から、もともとの「かちかち山」のあらすじ。
九行目「ところが」から、話は一転最近の絵本の「かちかち山」のあらすじ。
十四行目「元の「かちかち山」は」からは、昔話を変えてしまうことへの筆者の考えを述べている。

問題II 論理的読解力A

第一問 解答 (8点)

それは忍辱

■解説

この文章の発表年次が問題文末尾に書かれている。「昭和十一年」なので、戦時中に書かれたものであることをつかまなければならない。(第二次世界大戦終戦が昭和二十年)

「昭和七年の夏よりこの方、世のありさまの変るにつれて、鐘の声もまたわたしには明治の世にはおぼえた事のない響を伝えるようになった」とあることに着目。まさに日本がしだいに戦争へと突入し始めた時代である。
では、それがどんな響きかという点、直後に「それは忍辱と諦悟の道を説く静なささやきである」とあるが、一文という条件に注意。

第二問

■解答 (各3点)

春ア 夏オ 秋エ 冬ウ

■解説

必ず文中の該当箇所を押さえること。軍国主義時代には、作家は自由に小説を書くことを禁じられていた。荷風も当然、麻布の書齋に閉じこもって、小説を書くこともできずにただ鐘の音を聞いていたのである。

「この年月の経験で」から、春夏秋冬とその鐘はどのような響きであったかを綴っている。春からではなく、冬から順に綴られていることに注意。
冬「コーンとはつきり最初の一撞きが耳元にきこえてくる」から、ウ「清澄」。

春「むかしの思い出に人をいざなうことがある」から、ア「追憶」。

夏「疲労と倦怠を思わせる」から、オ「倦怠」。

秋「屈原が『楚辞』にもたとえたい」とある。「楚辞」がどのような漢詩か分からない時は、消去法。「勇壮」「悲壮」「苦悩」と残るが、その後、「鐘の音が奮闘勇躍の氣勢を揚げさせたことを説いていない」とあるから、「勇壮」を消去。

さらに「西風に、とぎれて聞える鐘の音」とあるので、「苦悩」より、「悲壮」が適切。

第三問

■解答 (各2点)

- (1) ウ (2) イ (3) エ (4) オ (5) ア

■解説

副詞の問題。副詞は用言(述語となる語)との関係から決定する。

- 直前に「それがために」とあるが、「つかれてぼんやりしている時には」そのためにもっとぼんやりするのだから、ウ「なおさら」が答。
- 直前で「今日よりは」とあるので、比較をあらわす、イ「もつと」が答。
- 「めったに」ない」という呼応関係。
- 「長くなる」を修飾する言葉なので、オ「やがて」。「やがて日の長くなること」で、冬から徐々に日が長くなっていくことになる。
- 「耳にする」にかかる言葉は、ア「ふと」。

第四問

■解答 (各5点)

ア オ

■解説

ア 鐘の音を春夏秋冬と季節の変化、さらに朝から夜更けまでの時間の変化の中で捉えているので○。
イ 偉人、文人の名を挙げてはいるが、何も彼らの文章を引用しているわけではないので、×。
ウ 特に隠喩表現を多用してはいないので、×。
エ どちらかという点と日本の感覚で描写されているので、「西洋画のように描写し」は根拠がない。
オ 「昔と今」との対比が使われているから、○。
カ 作者は戦争に突入している今の風潮を一貫して嘆いているので、「作者の揺れ動く心情」が×。

問題III 論理的思考力

第一問

■解答 (各6点×2)

- (1) 現実 ・ 超えた
- (2) あなたは ・ 前近代の

■解説

(1) 合理性とは不合理の上に合理の網をかぶせた虚構である。
まず「合理性とは虚構である」という主語と述語の関係をつかまえる。後は、言葉のつながりを考えればいい。

(2) 自分は何者かという問いかけは近代の産物である。「問いかけは産物である」が主語と述語の関係。どんな問いかけかという点、「自分は何者か」という問いかけ。

第二問

■解答 (12点)

わかり切ったことと思つていても、問題にしてみると実にわからなくなるものが無数に存している。

■解説

前半が筆者の主張で、後半がその具体例なので、文章の要点は前半である。

第三問

■解答 (16点)

伎楽面が「人」を積極的に強調し純粋化しているのに対し、能面は徹底的に人らしい表情を抜き去ったもので、能面の不思議な感じはこの否定性にもとづいている。

■解説

伎楽面と比べて、能面を論じた文章。

- ①伎楽面が人を積極的に強調・純粋化 ②能面は人らしい表情を抜き去った ③能面の否定性 ④三つのポイントが必要。

問題IV

論理的読解力B

第一問

■解答 (10点 連続する四つの並びがあつていれば6点)

C ↓ E ↓ B ↓ D ↓ F ↓ A (↓ G)

■解説

Gが最後に来ることは予め決まっている。Gは科学も芸術も「絵そら事」と述べているので、この前に来るのは、A(科学的系統⇨製作物、芸術家の製作物⇨空想的)。A↓Gという順番。

全体的に科学者と芸術家の共通点を述べた文章であると読み取つたなら、C(科学者には美的生活がある)の後、その具体例がE(「たとえば」に着目)更にその具体例がB(ニュートンの例だと分かる)。

次に、Dの冒頭、「また一方において芸術家は」とあるので、科学者に美的生活があるのと同じように、芸術家にも観察力や分析力が必要だと来なければならぬ。

残つたのは、AとFであるが、Aに「畢竟」とまとめる言葉があり、しかも、A↓Gとのつながりを考えると、D↓F↓Aの順番となる。

第二問

■解答 (各3点)

(1) ウ (2) ア (3) オ (4) イ

■解説

(1) 直前に「整然たる系統の下に一括される事を知つた時」とあるので、ウ「混沌」が消えたと分かる
(2) 「結晶の整調の美」をたとえたものだから、ア「管弦楽」。

(3) 直後に「観察力や分析力の頭脳をもつていなければなるまい」とあるので、オ。

(4) 「整合の美」の話なので、イ「美感」。

第三問

■解答 (8点)

B

■解説

Bの文章は、「整調の美」を管弦楽にたとえているので、末尾の「異なつたところがある」を、「似通つたところがある」に変えなければならない。

第四問

■解答 (10点)

科学者と芸術家の共通点

■解説

科学者と芸術家は根本においてはとても似通っているというのが、筆者の主張。

問題V

論理的表現力(40点)

■ポイント

- ①自分の主張に対して、論証できているか。
②具体例や理由付けが適切か。
③段落分けが適切か。
④論文の文体、用語が適切か。
⑤原稿用紙の表記の仕方に従っているか。

■①の解答例

私は学習内容を減らして、ゆとり教育を今後も推進していくべきだと考える。なぜなら、知識偏重の詰め込み教育は今なお是正されず、子供達は自分で問題を解決することなく、ただ与えられた答を探すだけになってしまっているからである。

私の弟は小学生だが、その学校では総合学習の間、様々な取り組みを行い、試行錯誤の結果ようやく新しい方向性を見いだしたところだったと聞く。それなのにまた方向転換を余儀なくされたなら、現場の混乱を招くだけである。

ゆとり教育が機能するには、ある程度長期にわたつてその成果を見守る必要がある。そのためには時には我慢をすることも大切ではないか。知識偏重から生きる力をつけるための学力重視へ、これは時代の要請なので、そう簡単に断念すべきではないと、私は考える。

■②の解答例

学力を高めるためには、ゆとり教育を見直し学習内容を増やさなければならない。なぜなら、現在、国際社会において、日本の競争力を高めるためには、より高度な学力が必要とされているからである。中国や韓国など、日本に対抗するために、教育政策に力を入れ、実際にかなり高い学力を持った人材を多く輩出している。

最近、企業内でも「ゆとり世代」は何も知らなくて使い物にならないといった声を多く聞くようになった。かつてよりも学習内容を大幅に減らした分だけ知識だけでなく、努力や学力も身につけることができなくなったのだ。

やはり若い時は死にもぐるいで勉学に励むことが大切である。そのためには、必要な知識量を減らすことなく、学力向上のために徹底的に鍛えぬこと

が必要とされている。

■③の解答例

「ゆとり教育」も、「詰め込み教育」も、どちらも知識を単なる情報としてしか捉えていない。情報を増やしたり減らしたりするたびに現場が混乱するだけで、すでにそういった考え方自体が時代遅れだと言えよう。

たとえば、今や膨大な知識の管理はコンピュータの仕事であり、人間はそうした膨大な情報を駆使して、何をすることが問われるようになった。いくら記憶が得意で、計算が正確で速くても、とてもコンピュータにはかなわない。

新しい時代にはそれにふさわしい新しい教育こそが必要である。コンピュータ社会では、いくら知識を持っていても役に立たないからである。そのためには、知識を使いこなす人間の力が重要になってくる。使いこなすためには、一つ一つの知識を理解し体系づける、新しい学力こそが問われることになるだろう。